

キンメリオイおよびスキタイの西アジア侵攻

雪嶋宏一

The Cimmerian and Scythian Invasions of West Asia

Koichi YUKISHIMA

前8世紀末～前7世紀にキンメリオイとスキタイが西アジアに侵攻した。彼らに関する62点のアッシリア史料があるが、ギミッラーヤ(キンメリオイ)は蛮族と同義語としても使用され、イシュクザーヤ(スキタイ)はほぼ前670年代だけ記録された。ギリシア・ローマ史料ではキンメリオイはアナトリアで言及され、スキタイはアジアを支配したと記録された。西アジアにおける彼らの滯在はこの地域で発見される青銅製袋穂式鏃などで知られるが、キンメリオイ関係遺物が識別されず、スキタイの遺物だけが発見されている。この問題についてカマン・カレホユック出土の青銅製袋穂式鏃や馬具などを中心に検討して、先スキタイ時代に關係する資料が確かにあることを指摘し、前8～前6世紀にキンメリオイを含む中央ユーラシア遊牧民の文化の西方拡大でこれらの資料が西アジアに登場したとみなした。

キーワード：キンメリオイ、スキタイ、アッシリア、アナトリア、中央ユーラシア草原

The Cimmerians and Scythians invaded West Asia in the end of the 8th–7th century B.C. The term 'Gimirraia' (the Cimmerians) were also used a synonym of barbarians, and the term 'Iskuzaia' (the Scythians) were recorded mostly in 670s B.C. in 62 Assyrian documents. In the Greek and Roman documents, the Cimmerians were referred in the contexts of Anatolia, and the Scythians were recorded as the conquerors of Asia. Their presence in West Asia is known from the bronze socketed arrowheads and other related materials found in these regions. Although objects relating to the Cimmerians cannot be noted among these materials, Scythian artifacts are usually present. Considering some bronze socketed arrowheads, horse harnesses, etc. mainly from Kaman-Kalehöyük in Anatolia for the sake of resolving this problem, it is possible to denote the related materials including an arrowhead of the pre-Scythian period. These materials might appear in West Asia by the expansion of the cultures of the Central Eurasian nomads including the Cimmerians to the west in the 8th–6th centuries B.C.

Key-words : Cimmerians, Scythians, Assyria, Anatolia, Central Eurasian Steppes

はじめに

前8世紀末から前7世紀にかけてキンメリオイとスキタイが相次いで西アジアに侵攻した。ギリシア人たちはその土地を「キンメリア(Kimmeria)」、「スキティア(Skythia)」、その集団名を「キンメリオイ(Kimmerioi)」、「スキタイ(Skythai)」などと呼び、アッシリアではその地名を「ガミル(Gamir)」、「ギミッラ(Gimirra)」など、集団名を「ガメラーヤ(Gameraia)」、「ギミッラーヤ(Gimirraīa)」、「アシュクザーヤ(Aškuzāia)」、「イシュクザーヤ(Iškuzāia)」などと記録した。ギリシアとアッシリアの双方で記録された名称が音韻的に類似していることから、ギミッラーヤはキンメリオイ、アシュクザーヤあるいはイ

シュクザーヤはスキタイと同一視されている。

中央ユーラシア考古学では彼らの西アジア進出は中央ユーラシアの遊牧民集団が初めて世界歴史に登場した事件として言及されているが、西アジア考古学ではこの問題についてはアッシリア史料の研究は行われているが、出土遺物については十分な研究が行われてきたわけではない。

日本西アジア考古学会の2000年度の年間テーマ「メソポタミアと周辺地域」で、西アジア文明世界と中央ユーラシア草原の遊牧文化との接触というテーマが取上げられ、筆者は西アジアにおけるキンメリオイとスキタイの問題について発表した¹⁾。本稿では、その時の議論を踏まえ、最近の研究動向も考慮して、アッシリア史料、ギリシア・ローマ

史料、西アジアとりわけアナトリアの考古学資料についてまとめ、問題点を明らかにしたい。

アッシリア史料におけるギミッラーヤとイシュクザーヤ

近年フィンランド・アカデミーの Neo-Assyrian Text Corpus Project による State Archives of Assyria (SAA) のシリーズでアッシリア史料が続々と公刊され、ギミッラーヤとイシュクザーヤ関係史料が多数収録された (State Archives of Assyria 1, 4, 5, 6)。プロジェクトに参加した G.B.ランfranchi (Lanfranchi) はギミッラーヤ関係史料をサルゴン2世 (Sargon II)、エサルハッドン (Esarhad-don)、アッシュルバニパル (Assurbanipal) の各王の時代と地域に整理してギミッラーヤについて考察した。アッシリアではギミッラーヤは「蛮族 (umman-mān-da)」とみなされるだけであり、その言語には小アジアの言語の要素が含まれるとしてイラン語系統説を否定した。また、キンメリオイは象徴的あるいは理想的な蛮族とみなされたと考えた (Lanfranchi 1990)。

一方、A.I.イヴァンチク (Ivanchik) はキンメリオイ・スキタイ関係のアッシリア史料54点を集成して原文の翻刻とフランス語訳注を発表した。彼は、アッシリア史料ではギミッラーヤとイシュクザーヤは特定の集団として区別されていたとみなしした。そして、ギミッラーヤの言語にはアナトリアのルウイ語の影響が見られることを指摘した (Ivanchik 1993)。

最近公刊されたこれらのアッシリア史料集でギミッラーヤ、イシュクザーヤに言及している関係文書（復元されたものを含む）62点をイヴァンチクの番号に準拠して概ね年代順にまとめると表1のようになる。サルゴン2世時代が8点 (Nos. 1~8)、サルゴン末期からエサルハッドン初期までのどこかに年代付けられるものが1点 (No. 9)、エサルハッドン時代が41点 (Nos. 10~50)、アッシュルバニパル時代が12点 (Nos. 51~62) である。これらのうち、ガミルおよびギミッラーヤのみに言及するものが48点 (Nos. 1~10, 12, 14~23, 32~39, 43~51, 53~62)、アシュクザーヤおよびイシュクザーヤのみに言及するものが5点 (Nos. 24~25, 40~42)、両者を併記するものが8点 (Nos. 11, 13, 26~31)、具体的な名称がないものが1点 (No. 52) である。

ギミッラーヤ関係史料は前716～前714年から前640～前639年までの間に断片的に残されているが、イシュクザーヤについての記録は前677年から前669年頃までの間に限定されている。

ガミルおよびギミッラーヤについての最古の記録はサルゴン2世の第8回軍事遠征 (前714年) の際得られた情報で、ウラルトゥに対抗していた勢力の地方ガミル、ガメラ、ギミルが言及された。これがギミッラーヤの住む土地とみな

されている (Nos. 1~7)。このギミルの所在地については、カッパドキア東部 (Piotrovskii 1959: 233; Diakonoff 1981: 111)、ウラルトゥの北東 (Pogrebova 2001)、カフカス南部 (Ivanchik 2001) という諸説がある。

次にギミッラーヤが記録されたのは前679年である。「分遣隊長ギミラーヤ、^mSUHUS-KASKAL (Ubur-Harrān) の立会い」という一文が法律文書にある (No. 10)。イヴァンチクはこの人物はアッシリア人であるとしている (Ivanchik 1993: 254)。

続いて前679～前676年頃にキリキア地方のフブシュナで「ギミッラの王テウシュパ、はるか遠方に居住する蛮族 (^mte-uš-pa KUR.gi-mir-ra-a-a || ERIM-man-da šá a-šar-šú ru-ú-qu)」をアッシリア軍が打ち破ったと記録された。この同じ碑文の中でマンナイのグテイが「アシュグザ国 (イシュパカ) のイシュパカ (^miš-pa-ka-a-a KUR.aš-gu-za-a-a)」の軍団との戦いで死亡した事件が言及された (No. 11)。同じ内容がティル・バルシブ (テル・アフマル Tel Ahmar) 出土の碑文でも「ギミッラーヤのテウシュパ ([¹te-uš-p] a-a amelgi-mir-ra-a-a)」および「アシュクザーヤのイシュパカ (¹iš-pa-ka-a-a ^{mat} aš-ku [-za] -a-a)」と記録された (No. 13)。これらはギミッラーヤの首長とイシュクザーヤの首長が同時に言及されたユニークな文書である。それによってギミッラーヤとアシュクザーヤは同時代にそれぞれの首長に率いられて別な地方で軍事行動を展開していたことが明らかになる。

ギミッラーヤは前676/75年頃にマンナイとともに言及され (No. 17)、ムシュキ (Muški) (フリュギア) と同盟してキリキアのメリドを攻撃した (No. 21)。また、メディア王カシタリトゥ (Kaštaritu) の反乱の際 (前674～72年) にはギミッラーヤはメディアやマンナイの軍団とともに「ギミッラーヤ人の軍団 (LÚ.ERIM.MEŠ LÚ.gi-mir-ra-a-a)」という語句だけで列挙された (Nos. 32~38)。672年以降にはキリキアのヒラック方面でも言及された (No. 22)。エサルハッドンの治世末年の反乱では、ギミッラーヤはヒッタイト人やエジプト人、ヌビア人などとともに列挙され、依然アッシリアの強敵であったようだ (Nos. 46~48)。

エサルハッドンはイシュクザーヤを味方につけるため、前672年頃に「イシュクザ (国) の王バルタトゥア (Bar-tatua)」に娘を降嫁させた (No. 24)。バルタトゥアはヘロドトスが記録するプロトテュエス (Prototypes) (ヘロドトス 1971: 85) と同一視されている。この婚姻によりバルタトゥアがエサルハッドンを護衛することが約束された。イシュクザ (国) の場所についてはアゼルバイジャンとその周辺とみなす研究者が多いが (cf. Diakonoff 1981: 120~121)、考古学的に証明されたわけではない。

ギミッラーヤとイシュクザーヤが同時に言及された文書

は大半が復元されたもので、アッシリア北方のフブシュキアやビート・ハンバン方面に関するものが多く、メディアやマンナイの軍隊とともに列挙されたものであり(Nos. 26~31)、史料的な内容を欠いている。

ギミッラーヤはアッシュルバニバルの年代記ではリュディアの敵として何度も言及されている(Nos. 52~58)。リュディア王ギュゲス(Gyges)がギミッラーヤの攻撃に対してアッシリアに援軍を要請したが、結局リュディアは援軍なしで攻撃に耐えられず、ギュゲスは前644年頃亡くなつたと考えられている(Ivanchik 1993: 105)。

アッシュルバニバル王末年の年代記に「蛮族で破壊者の王ドゥグダッメ(Dugdamme)」が記録された(Nos. 57~59)。また、「蛮族の王ドゥグダッメとその子サンダクシャトル(Sandakšatru)」がアッシリアに侵攻した(No. 60)。ドゥグダッメはギミッラーヤではなく「蛮族」として言及された。しかし、それ以前にも「蛮族ギムラーヤ」などの言及があり(No. 61)、またドゥグダッメはストラボンが記録したキンメリオイの首長リュグダミス(Lygdamis)(ストラボン 1994/1: 110)と同一視されることから、蛮族はギミッラーヤを指していたとみなされるが、それが果たして特定の民族グループを指していたかどうか定かでない。

以上、アッシリア史料ではギミッラーヤはアッシリアに敵対する蛮族としてメディア方面とアナトリア方面で言及された。一方、イシュクザーヤは当初マンナイと同盟してアッシリアに対抗したが、前672年にエサルハッドンと同盟を結んで以降は記録が乏しい。

ギリシア史料におけるキンメリオイとスキタイ

ギリシア史料ではまずホメロス(Homerus)が『オデュッセイア』の中でキンメリオイをオケアノスの涯の冥界入り口付近に居住する種族として言及した(ホメロス 1971: 325)。『イーリアス』ではフリュギアのサンガリス河畔にアマゾンたちが攻め寄せたと伝えた(ホメロス 1964: 110)。それがキンメリオイのゴルディオン攻撃の反映であるとみなされている。ギリシア史料でヘロドトス以前にキンメリオイの起源を明かにするものが少ないため、キンメリオイの黒海北岸起源を否定する見解がある(Kuklina 1985: 63; Sauter 2000: 252~253)。

ヘロドトス(Herodotus)はキンメリオイの故地が黒海北岸にあったと述べ、そこに「キンメリア砦」「キンメリアの渡し」「キンメリア・ボスボロス」があると証言した(ヘロドトス 1972: 14)。そして、キンメリオイの西アジア侵攻についてのエピソードを伝えた。それによれば、スキタイが侵攻してくることを知り、彼らは王族と民衆との間で意見が対立して、王族は祖国で討ち死にし、民衆はポンツ沿いに進んでアジアの地に侵入し(ヘロドトス 1972: 13)、

ポンツ沿岸のシノペの半島に住みついた(ヘロドトス 1972: 14)。さらに、リュディアのサルディスをアクロポリスを除いて占拠したり(ヘロドトス 1971: 20)、イオニアに侵攻したりしたが(ヘロドトス 1971: 13)、リュディア王アリュアッテス(Alyattes, c.610~560 B.C.)に駆逐されたという(ヘロドトス 1971: 21)。

ストラボン(Strabo)もまたキンメリオイの故地をキンメリアのボスボロスとみなし(ストラボン 1994/1: 28)、スキタイによって駆逐されたと伝えた(ストラボン 1994/2: 27)。そして、トレーロイ(Treroi)とも呼ばれるキンメリオイがパフラゴニア侵略の際にポンツ(黒海)の右側の国々とその隣国を攻略し、またフリュギアを攻撃した時にはミダス(Midas)を死に追いやった(ストラボン 1994/1: 110)。エウセビオス(Eusebius)によればミダスの死は前696/5年であるが(Eusebius 1956: 92b)、実際は前675年頃であろうとみなされている。キンメリオイの首長リュグダミスはリュディア、イオニアまで進軍し、サルディスを占拠したが、キリキアで落命した(ストラボン 1994/1: 110)。サルディス攻撃は前7世紀のカリノス(Callinus)が伝えていた(ストラボン 1994/2: 268)。また、トレーロイはスキタイ王マデュエス(Madyes)に駆逐されたという(ストラボン 1994/1: 110)。

一方、スキタイはキンメリオイを追ってカウカソス山を右に見て通過し、メディアに侵入しメディアを破って全アジアを28年間にわたって支配した(ヘロドトス 1971: 85)。彼らはエジプトへ向かう途中パレスティナのアスカラントで神殿を略奪した(ヘロドトス 1971: 85~86)。エウセビオスはスキタイのパレスティナ侵略を前635年とする(Eusebius 1956: 96b)。メディアがニネヴェを攻囲した際にはスキタイ王マデュエス王がアッシリアの援軍に駆けつけた(ヘロドトス 1971: 85)。しかし、メディア王キャクサレス(Cyaxares)がスキタイをアジアから放逐した(ヘロドトス 1971: 86)。

スキタイのアジア支配の時期については、キャクサレスの治世以前の前652~前625年、エウセビオスの年代記を考慮して前640~前613/2年(Alekseev 1992: 64)、キャクサレスの治世の初めの前623/22年以降(cf. Dobatur et al. 1982: 179~180)、ニネヴェ陥落以後の前612~前585年など諸説ある(cf. Dobatur et al. 1982: 179~180)。イヴァンチクはローマの歴史家ポンペイウス・トログス(Pompeius Trogus)が伝えた歴史(ユスティヌス抄録)によってまったく異なる説を提起した(Ivanchik 1999)。それによれば、スキタイはアジアを3回支配した。初回はエジプトへ軍事遠征を行うが果たせず帰路でアジアを制圧し貢納義務を負わせて15年間滞在した。2回目は王族の若者プリュノス(Prynnus)とスコロピトス(Scolopitus)がスキティアを追

放されて仲間たちとカッパドキアのテルモドン川辺に居住して隣国を略奪した。3回目は8年間アジアに遠征している間に妻が奴隸と通じてしまい故郷への帰還に苦労したというものである(トログス 1998: 62-68)。イヴァンチクはこれらの遠征を、中央カフカスのイラン系民族オセット人のナルト叙事詩で語られる新婚の男たちの通過儀礼としての略奪(オセット語で *balc*)の反映であると考えて、このアジア支配の時期を28年間という年数を考慮せずに、スキタイがパレスティナを劫略した前626～前616年の間とみなした。この時期に『旧約聖書』「エレミア書」に北の蛮族が記録されたとした。しかし、一部族の通過儀礼のための遠征で西アジアを支配したとみなすのはこの問題を矮小化した見解ではなかろうか。

西アジアにおけるキンメリオイおよびスキタイ関係考古学資料

アナトリアからイラン北西部、カフカス南部からパレスティナにいたる西アジア各地で青銅製袋穂式鏃などの中央ユーラシア草原文化の資料が多数発見され、キンメリオイやスキタイに関係付けられている。B.B.ピオトロフスキイ(Piotrovskii)はウラルトゥの城塞址カルミル=ブルール(Karmir-blur)の調査でスキタイ文化に関係する鉄剣や青銅製鏃などの武器や動物文様が施された骨製品などを発見して、スキタイとウラルトゥの関係を論じた(Piotrovskii 1959: 232-256)。彼は「ギミッラ」については遊牧民を広く意味したと考えた(Piotrovskii 1954: 158)。T.スリミルスキ(Sulimirski)はこれらの青銅製袋穂式鏃を検討して、西はアナトリアのエーゲ海沿岸から東はイラン北西部、カフカス南部から南はパレスティナまで広がったそれらの分布をスキタイの活動と関係付けた(Sulimirski 1954)。

カフカス南部や北西イランではスキタイ文化に関係する青銅製袋穂式鏃などの武器や馬具が多数知られ(Erzen 1978: 53-56; Kleiss 1979: 178; Esayan and Pogrebova 1985)、アナトリアではボアズキヨイ(Bögazköy)のビュックカレ(Büyükkale) (フリュギア時代の層) から青銅製袋穂式鏃が検出され(Boehmer 1972)、ノルシュンテペ(Norşuntepe)では馬の陪葬墓から特徴的な馬具が発見された(Hauptmann 1983)。また、イミルレル(İmirler)村と、タショヴァ(Taşova)村とラディック(Ladik)村の間でスキタイ文化に特徴的な剣や鏃とともに埋葬された埋葬址が発見されスキタイ戦士の墓とみなされた(Ünal 1983)。

黒海北岸や北カフカスでは西アジアとの関係を示す資料が発見された。黒海北岸のノサチェヴォ(Nosachevo)古墳から出土した青銅製の算盤玉形の透かし状飾板がアッシリアのニネヴェ(Nineveh)などの宮廷レリーフに表現された馬の胸帶に見られる飾りと類似することからレリーフの年

代を古墳編年の根拠とし、黒海北岸とアッシリアを結ぶ資料とみなした(Kovpanenko 1966: 177-178)。北カフカスではクリン=ヤル(Klin-yar)第3墓群186号墓出土の前7世紀前半に編年されるアッシリア製青銅製兜や、クラースノエ・ズナミヤ(Krasnoe Znamya)1号墳南墓出土のアッシリア由来のイシュタル女神図などはキンメリオイやスキタイの西アジア遠征時代にもたらされた資料とみなされた(Petrenko 1980; Belinskii 1990)。

西アジアにおけるキンメリオイ・スキタイ関係資料の問題は、文献資料でキンメリオイの活動がアナトリアでしばしば記録されながら、アナトリアでキンメリオイに関係付けられる遺物が識別されず、史料に活動がほとんど記録されていないスキタイの遺物がアナトリア各地で発見されているという点である。そのため、A.Yu.アレクセエフ(Alekseev)は、アナトリアに侵入したキンメリオイはすでにスキタイ文化に同化しており考古学上区別できないとした(Alekseev 1992: 91)。そして、アナトリアで発見された遊牧民タイプの遺物を前7世紀第2四半期から中葉に編年して、これらの遺物をキンメリオイのものであると断じた(Alekseev, Kachalova and Tokhtas'ev 1993: 82)。

イヴァンチクは、この見解をさらに進めて、アナトリアで発見されるスキタイ関係の遺物と前期スキタイ時代のケレルメス(Kelermes)古墳群の遺物との類似を根拠に、ケレルメス古墳群をも前7世紀前半に編年した。イヴァンチクはさらに黒海北岸草原でのスキタイ文化の登場を前8世紀中葉まで遡らせるという見解を発表した(Ivanchik 2001)。しかし、ケレルメス古墳群は近年L.K.ガラニナ(Galanina)によって前7世紀中葉(660～640)から末に編年されており(Galanina 1997: 190-192)、ケレルメスの資料にはそれよりも古い年代に編年される資料が見当たらぬ。一方、イヴァンチクはノルシュンテペの馬の陪葬墓が石積みであることなどを根拠に、キンメリオイを中心とするカフカスのコバーン(Koban)文化と関係づけて、キンメリオイの黒海北岸起源を否定した(Ivanchik 2001)。

日本アナトリア考古学研究所のカマン・カレホユック(Kaman-Kalehöyük)発掘調査では青銅製袋穂式鏃や動物文などのスキタイ文化に関係する遺物が多数検出されている(雪嶋 1992, 1998; 高浜 1994, 1999)。筆者はこれらの青銅製鏃の中に先スキタイ時代に関係する型式の鏃があることを指摘した(雪嶋 1998: 188～189; 藤川 1999: 205)。本稿ではこの鏃を含めた関係資料をカマン・カレホユックを中心にして言及する。

1. 青銅製袋穂式鏃

カマン・カレホユックで出土した前1千年紀の中央ユーラシア草原文化に関係する青銅製袋穂式鏃は1999年までに105点を数える²⁾。これらの青銅製鏃は両翼鏃と三翼鏃に大



図1 先スキタイ時代の文化および最初期のスキタイ文化に関する遺跡地図

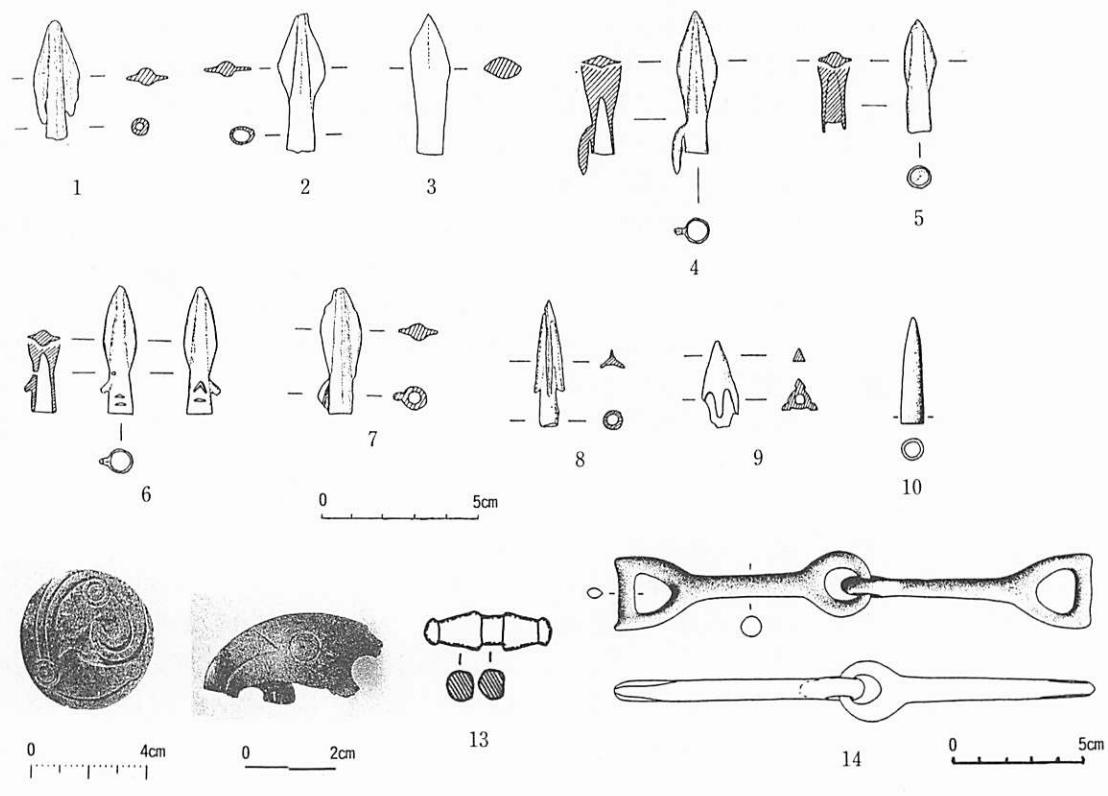


図2 アナトリア出土のキンメリオイおよびスキタイ関係資料

1~10 青銅製袋穂式鎌 (1~9: カマン・カレホユック; 10: タショヴァニアラディク)

11 鳥頭紋骨製品 (カマン・カレホユック) 12 鳥頭形骨製辻金具 (カマン・カレホユック)

13 骨製留具 (カマン・カレホユック) 14 青銅製銜 (イミルレル)

図版典拠 1~9 雪嶋 1999; 図4-1~3, 6, 5: 図5-1, 4; 図6-4, 6

10 Ünal 1983: Abb. 3-1

13 高浜 1994: 図2-(1) (縮尺不明)

11~12 高浜 1999: 写真, 写真3a

14 Ünal 1983: Abb. 1-4

別される。両翼鎌が86点、三翼鎌が19点で、ボアズキヨイ同様に三翼鎌の発見例が少ない点が特徴である。黒海北岸、カフカス、アナトリアなどの出土例と比較して、両翼鎌はとりあえず7型式に、三翼鎌は8型式に分類される(雪嶋1998:184-187)。これらの資料はIIb層(前7世紀)、IIa層(前6~前4世紀)、I層(オスマン・トルコ時代)、南東の城塞区から発見されているが、上層からの度重なる掘り込みの結果、遺物が上層へ遊離しているため出土層位によって鎌を編年することはできない。これらの型式の中で本稿で議論されている時代に編年されるものが両翼鎌第1~5型式、三翼鎌第4・6型式である。

両翼鎌第1型式は翼部の輪郭が矢羽形をしたもので(図2-1)(雪嶋1998:図4-1, 8-1)、類例としては黒海北岸の先スキタイ時代の古墳ヴィソーカヤ・モギーラ(Vysokaya mogila)(前8~前7世紀)出土の13点(Bidzilya and Yakobenko 1974: 155)とマーラヤ・ツィンバルカ(Malaya Tsinbalka)(前8世紀)出土の2点(Klochko 1979: 42)、ヴォルガ川下流域で採取された3点(Smirnov 1961: 111)、アムダリヤ下流域のサカ最初期の古墳サカル・チャガ(Sakar-chaga)VI墓群20号墳(前8世紀末~前7世紀)出土の2点(Yablonskii 1991: 78)がある(雪嶋1998:185)。これらの例はカマン・カレホユックのものよりも袋穂がやや短いが、カマン・カレホユックの例がこれらと型式学的に関係していることは確かである。この型式はヴィソーカヤ・モギーラで13点出土したほかは少数ずつしか発見されていないため、カマン・カレホユックでの1例の発見は重要であろう。つまり、アナトリアで先スキタイ時代に関係する遺物が検出されていなかったことが西アジアにおけるキンメリオイを考える上で大きな問題点であるが、このような遺物が発見されたことは、先スキタイ時代の文化がアナトリアに伝わっていたことを示す根拠の一つとなりえようが、1例のみでは十分な論拠として論じることはできない。

第2型式は大型で袋穂が長く末端に向かってやや広がっており、翼部はひし形で幅が広いものである(図2-2)(雪嶋1998:図4-2)。類例はウラル川流域の最初期のスキタイ文化の古墳とみなされたグマロヴォ(Gumarovo)1号墳3号埋葬から出土した鎌である(Ismagilov 1988: 37)。この埋葬は前7世紀初頭に編年されている(Ismagilov 1988: 45)。

第3型式は全体の輪郭がやや左右非対称で、断面がひし形を呈している(図2-3)(雪嶋1998:図4-3)。このような型式は中央ユーラシア草原の最初期のスキタイ文化に特徴的であり、ブルガリアからトヴァにいたる広い地域に分布する。ブルガリアのエンジャ(Endzha)2号墳(Terenozhkin 1976: 43)、グマロヴォ1号墳3号埋葬、中央アジア

のウイガラク(Uigarak)(Vishnevskaya 1973: 145, Tab. XIII-10)やサカル・チャガVI墓群20号墳(Yablonskii 1991: 78)、トヴァのアルジャン(Arzhany)古墳(Gryaznov 1980: Fig. 11)などから類例が出土しており、前8~前7世紀に編年されている。

両翼鎌第4型式は翼の輪郭がひし形を呈し袋穂が比較的長いものである。長さが4cm以上の大型と4cmに満たない小型がある(図2-4~5)(雪嶋1998:図4-4~8)。類例はアナトリアに広く分布し、ゴルディオン、ボアズキヨイのビュユックカレI層(ポスト・フリュギア時代)(Boehmer 1972: Taf. XXX~XXXI)、イミルレル(Ünal 1983: 67)、タショヴァニラディック(タイプG, H)(Ünal 1983: 72~76)、デミルジヒュユック=サルケト(Demircihuyuk-Sariket)(Seher 1998: 138~139)などで検出されている。グルジアのサムタヴロ(Samtavro)墓群(Il'inskaya and Terenozhkin 1983: 29)、北カフカスのケレルメス24号墳(Galanina and Alekseev 1990: 39)やクラースノエ・ズナーミヤ1号墳南墓(Ivanchik 2001: 32)、黒海北岸のジャボチン(Zhabotin)村近郊524号墳(Illins'ka 1973: 14)、ブルガリアのエンジャ2号墳から出土している。大型のものはジャボチン出土例からジャボチン型といわれ、概ね前7世紀に編年されている(Illins'ka 1973: 16)。イヴァンチクはアナトリアにはジャボチン型は見られないと述べたが(Ivanchik 2001: 57)、以上の理由でそれは誤りであろう。

第5型式の両翼鎌は輪郭が葉形を呈しており、翼の幅が狭いものと広いものとがある。幅の狭いものは袋穂が長く高い位置にかえりが付く。幅広のものには翼が左右非対称の例がある(図2-6~7)(雪嶋1998:図5-1~5)。類例はサルディス、ボアズキヨイ、イミルレル、タショヴァニラディック(タイプE, F)、カルミル=ブルール(Piotrovskii 1959: 240; Il'inskaya and Terenozhkin 1983: 37)、ケレルメス24号墳(Galanina and Alekseev 1990: 39)、黒海北岸のスタールシャヤ・モギーラ(Starshaya mogila)(Il'inskaya 1968: Pl. II)やレピヤホヴァタヤ・モギーラ(Repyakhovataya mogila)2号墓(Il'inskaya, Mozolevskii and Terenozhkin 1980: 45)から出土しており、前7世紀中葉~前6世紀に編年される。カマン・カレホユック第5型式の一例に袋穂に刻み目が見られる(図2-6)。このような刻み目はボアズキヨイ(Boehmer 1972: Taf. XXX-895)やタショヴァニラディック(cf. Ünal 1983: Abb. 3, 20, 21, 24, 32~35)などでも見られ(雪嶋1998:図9-1~8)、同時代性を示すものであろう。イヴァンチクはこの型式を黒海北岸のステプレヴォ(Stebleva)15号墳出土の青銅製鎌に類似するとして前8世紀に編年しているが(Ivanchik 2001: 115~118)、ステプレボの鎌の袋穂は非常に短いかほとんど突出していないのでこの見解は誤りである。

三翼鎌では第4型式と第6型式が関係する。第4型式は翼部が細長く、翼の末端は鋭角あるいは直角である(図2-8)(雪嶋 1998: 図6-4)。類例はグマロヴォ1号墳、エンジャ2号墳などで見られる。第6型式は小型で全体の輪郭が三角形を呈し、先端部の断面が三角形、翼末端では三翼となるもので(図2-9)(雪嶋 1998: 図6-6)、類例がケレルメス24号墳やリトイ(Litoy)古墳(Melyukova 1964: Pl. 6/E-5)などにあり、前7世紀後半～末に編年される。

カマン・カレホユックでは検出されていないがタショヴァニラディック埋葬址では5点の弾丸型鎌が発見された(図2-10)(Ünal 1983: 72, Abb. 1-5)。この型式の鎌はアナトリアではボアズキヨイ(Boehmer 1972: Taf. XXX-885)で見られ、その他ではクラースノエ・ズナーミヤ1号墳南墓(Ivanchik 2001: 32, Fig. 11-8)、ケレルメス24号墳、スタールシャヤ・モギーラ、レビヤホヴァタヤ・モギーラ2号墓で第4～5型式の鎌と併出している。中央アジアのサカル・チャガやウイガラクでも出土しており、初期スキタイ・サカの鎌のセットにしばしば見らるものである。

ところで、サカル・チャガ、ウイガラク、グマロヴォなどでは鎌のセットには青銅製有茎三翼鎌が含まれているが、黒海北岸・北カフカス、アナトリアではこれまでこのような型式は発見されていない。その点でアナトリア出土の鎌の構成は北カフカス・黒海北岸に近い関係にあるといえよう。

2. その他の武器

キンメリオイやスキタイに関係するその他の武器としては、イミルレルで青銅製鎧を伴う鶴嘴型斧と鉄製剣が出土している。鶴嘴型斧は刃部が鉄製で袋穂部が青銅製であり、刃部と袋穂部の交点に鳥頭形が一つ付き、さらに袋穂部の上部に2本の突帯がめぐり、下部には柄を固定するための孔が1つある特徴的なものである。高浜によれば類例は北カフカス、ヴォルガ川中流域のアナンノ(Ananino)、ウイガラク、東カザフスタンのウスチ・カーメンノゴルスク(Ust' Kamennogorsk)に至る広い地域に分布しているという(高浜 1994: 33)。しかし、この型式の鶴嘴型斧は黒海北岸では出土例がない。

一方、鉄製剣は長さ78.8cmの長剣で、いわゆる「腎臓形」の鍔と短い棒状の柄頭をもつ。この型式の剣は前期スキタイ時代(前7～前6世紀)や同時代のヴォルガ川流域のサウロマタイ文化に特徴的であり(Melyukova 1964: 47-49; Smirnov 1961: 10)、前述の鶴嘴型斧とは分布域が異なる。このような鉄製剣はカフカス南部ではカルミル=ブルールで出土している(長さ88cm)(Kossak 1987: 68)。このようなイミルレルの武器の構成は被葬者の文化的背景を示しているはずである。

3. 動物文様・馬具

カマン・カレホユックでは同心円状の目と大きな嘴で表現された猛禽類の頭部の文様が彫刻されたいわゆる動物文様のボタン状骨製品が検出された(図2-11)(遺物番号97001007)。極めてよく似た例がサルディスで知られている(高浜 1999: 写真2)。しかし、北カフカスや黒海北岸での類例は知られていない。ところが、この文様に関連があるグリフィン頭部や羊頭部を象った同様な骨製辻金具は前期スキタイ時代に特徴的な遺物であり、ケレルメスなどで多数出土し(Galanina 1997: Pl. 16)、アナトリアではノルシュンテペで2点発見された(Hauptmann 1983: Abb. 4-8)。また、同様なグリフィン頭部や羊頭部が骨製銜留め具の末端に象られた例がウクライナの森林草原地帯の前期スキタイ時代の古墳で多数発見されているが(Il'inskaya 1968: Pl. IV)、西アジアではジヴィエ、ハサンル(Hasanlu)、チャヴュシテペ(Çavuştepe)で知られている(Erzen 1978: Pl. 47; Kossak 1987: 45)。

また、馬具の辻金具として使用されたと推定される鳥頭をかたどった骨製品がカマン・カレホユックで出土している(図2-12)(遺物番号KL96-3)。類例は青銅製品がサルディスで発見されている(高浜 1999: 写真4)。カルミル=ブルールでは同様な形の骨製端末飾りが出土し、スキタイに関係付けられている(Piotrovskii 1954: 142)。

イミルレル出土の青銅製銜は外側の環の形がいわゆる鎧形をしたもので(図2-14)(Ünal 1983: 67)、類例は北カフカスや黒海北岸でよく知られ、前期スキタイ時代に特徴的な資料である。一方、ノルシュンテペ出土の2点の銜のうち1点(Hauptmann 1983: Abb. 4-5)は鎧形で軸の断面が蒲鉾形である。類例はケレルメスや(Galanina 1997: Taf. 17-25)黒海北岸のレビヤホヴァタヤ・モギーラ2号墓などで出土している(Il'inskaya, Mozolevskii and Terenozhkin 1980: 47)。これらはいずれも銜軸部に突起が作られているが、ノルシュンテペの例には突起がない。おそらく、スキタイの銜を模倣して現地で作成されたものであろう。他の1点(Hauptmann 1983: Abb. 4-6)は青銅製の針金を捩って作られたもので、類例はハサンル、アゼルバイジャンのマーリイ(Malyi)古墳やミングチャウル(Minge-chaur)などで知られ、前8～前7世紀に編年されているが、中央ユーラシア草原では特徴的ではない(Terenozhkin 1971; Muscarella 1988: 64)。

高浜はカマン・カレホユックで発見されたスキタイ関係資料として様々な用途に使用された真ん中がくびれた形の棒状留具1点(図2-13)(遺物番号KL92-76)を疑問ありとしながら取上げている(高浜 1994: 28)。このような形状の骨製留具がカマン・カレホユックでその後も2点出土している(遺物番号KL94-47, 97001937)。青銅製の棒状の留具

はノルシュンテペで発見されているが(Hauptmann 1983: Abb. 4-7)、黒海北岸から中国北辺に至る広い範囲に分布しているため、これらも中央ユーラシア草原と関係していると思われる(高浜 1994: 28-31)。

カマン・カレホユックでは牙形の小さな青銅製辻金具が2点出土している(遺物番号 KL88-531; KL90-1042)。これらの類例もカルミル=ブルール(Ivanchik 2001: 33, Fig. 12-11~14)、ク拉斯ノエ・ズナミヤ(Ivanchik 2001: 32, Fig. 11-18)、ケレルメス(Galanina and Alekseev 1990: 40, Fig. 6-19, 21)などで知られており、関係資料としてあげることができよう。

4. 馬の陪葬など

アナトリアではこの時期に馬の陪葬が知られている。前述のノルシュンテペでは3頭の馬が埋葬された陪葬墓が発掘された。方形の墓壙で、壁には石積みが丁寧に施されていた。陪葬馬は2頭の牡馬が頭を右に向けて置かれ、これらの下に1頭の雌馬が頭を左に向けて置かれていた。牡馬の傍らには犬の骨があった(Hauptmann 1983: Abb. 2)。イヴァンチクはこの陪葬墓の出土資料の類例をマールイ古墳に求め、さらにコバーン文化との関連を指摘している(Ivanchik 2001: 42, 283)。ところが、上述のようにこれらの馬は中央ユーラシア草原の銜の模倣と北西イランからカフカス南部に由来する銜を伴い、そしてスキタイ文化に関する辻金具や青銅製留め具を含んでいるため、草原文化の影響ではなかろうか。

ゴルディオンのトゥムルスKYでは墓壙中央に設置された木櫛の北東側の墓壙との空隙に2頭の馬が陪葬されていた。報告者は墓にフリュギアの副葬品として一般的なフィブラや青銅製帶がなく、ピンセットや奇妙な帶や衣服の飾板がある点で被葬者は遊牧民(キンメリオイ)の客人か傭兵ではないかと推測した(Kohler 1995: 234)。しかし、馬の陪葬は前2千年紀末以降アゼルバイジャンや北西イランで知られていることから(Pogrebova 1977)、この馬の陪葬を伴うからといって直ちにキンメリオイのものとする根拠はない。

ところが、カマン・カレホユックのIIb層(前7世紀)では、前代とは異なって羊が多く豚が少なく、馬がやや多くなり、羊の飼育に重点がおかれていた。羊の屠殺年齢が若く、羊の利用法が異なっていた。解体・調理の仕方にも特徴があり、鋭く重たい刃物で首や頭をたたき切った痕跡があり、他の鉄器時代に比べて狩猟がさかんであった(本郷 1999)。動物骨から見たこのような特徴がキンメリオイやスキタイが西アジアにあたえた影響によるものとすれば、これまで確認されていない事象として注目される。

おわりに

以上、西アジアにおけるキンメリオイとスキタイに関する資料について言及した。これらの中で最近疑問視されているのがキンメリオイの黒海北岸起源である。文献史料でも考古学資料でもキンメリオイの起源を明確にするものが乏しいため、西アジアに滞在したギミッラーやあるいはキンメリオイについては様々な解釈が行われるに至っている。

キンメリオイ文化はA.I.テレノシキン(Terenozhkin)が提起した前1千年紀初頭の黒海北岸草原の先スキタイ時代の文化であるという仮説に基づいてきた。つまり、キンメリオイはスキタイ同様に東方に起源するイラン系民族であり、その文化は切尔ノゴロフカ(Chernogorovka)期(前9~前8世紀前半)とノヴォ切尔カッスク(Novocherkassk)期(前8世紀後半~前7世紀前半)の2期に区分され、前7世紀中葉にそれに代わってスキタイ文化が出現したとするものである(Terenozhkin 1976; 高浜 1980)。しかし、この仮説に対して、両期には並行した時期があったのではないか、あるいは両期の馬具や武器の型式が異なるため地域や民族に違いがあったのではないかなどという意見が出された(雪嶋 1997)。しかしながら、キンメリオイ文化を黒海北岸の先スキタイ時代に位置づける点では変わらなかった。

ところが、最近ではイヴァンチクのようにキンメリオイの起源は黒海北岸にはないという意見が表明されており、キンメリオイ問題は一層複雑化している。しかし、カマン・カレホユックで先スキタイ時代の文化に関連する鐵が出土したことで、先スキタイ時代におけるアナトリアと黒海北岸・ヴォルガ川流域地方との関係は否定できることになる。しかしながら、テレノシキンのようにキンメリオイが黒海北岸から西アジアに移動したという仮説では上記のような考古学資料の広範な分布を十分説明できないことは明らかである。

前述のようにランフランキはギミッラーやアッシリアに敵対する蛮族で、特定の民族集団を指すものではないと述べたが、ギミッラーやがメディアやマンナイ、フリュギアなどの西アジア諸国とは明らかに区別された集団であったということは疑いない。おそらく、このような集団の中に「ギミッラーや」と呼ばれた何らかの一団があり、その名称が広く蛮族を指す言葉として使用されたと考えられよう。とすれば、この集団が前8世紀末に西アジアに登場した事情は、前8世紀中葉に編年されるアルジャン古墳に代表されるユーラシア草原東部の文化的な発展による遊牧民の西方拡大と関係があろう。この拡大によってカラスク文化型の青銅製剣やアルジャン古墳で検出された鎧型銜と末端がキノコ状にまるくなる銜留具(鑓)、モンゴリアで特に

発展した鹿の文様などを陰刻して人物を表現する鹿石、中国北辺で知られる青銅製両耳付釜(鏡)などが先スキタイ時代の北カフカス・黒海北岸草原に登場し(藤川 1999: 55-63, 89-94, 114-118, 195-201)、さらにバルカン半島および西アジアに達したのである。ギミッラーヤはこの拡大の中にいた集団とみなされよう。

前670年代にはその集団の中にイシュパカーが率いるイシュクザーやという一団がいた。まもなくバルタトゥアが首長となり、前672年頃にアッシリア王家と姻戚関係を結んで同盟者となり、エサルハッドンの護衛についた。しかし、それ以降アッシリア史料にほとんど記録されなくなった事情は、蛮族として「ギミッラーヤ」として一括されてしまったのか、ユーラシア草原に撤退したのか、アッシリアにとって敵対勢力でなくなったのかは定かでない。しかし、この集団は北カフカス・黒海北岸、さらにヴォルガ、ウラル、中央アジアで同時代に発展しつつあった文化を西アジアに持ち込み、アッシリア帝国末期に再び西アジアに存在を示し、アジアを支配したと後代語られるほど大きな影響を残したのである。

以上のように、中央ユーラシア草原の遊牧民集団がアッシリアやギリシア・ローマの史料に記録され、さらに彼らの文化的影響と考えられる事例がアナトリアを中心西アジアで検出されていることから、全体として前8~前6世紀に中央ユーラシア草原と西アジアとの歴史的考古学的な関係が指摘できるのである。

本稿執筆にあたり、林俊雄、高浜秀、川又正智、スペンサー・ロビンソン(Spencer M. Robinson)の各氏、キエフのクロチコ夫妻(Klochko, Lyubov' & Viktor)からのご協力に感謝申し上げます。カマン・カレホユック出土資料の研究の機会を与えて下さった大村幸弘氏および日本アナトリア考古学研究所、中近東文化センタートルコ調査室に感謝の意を表します。

註

- 1) 雪嶋宏一「紀元前1千年紀前半における騎馬遊牧文化の西アジアへの影響：武器・馬具を中心に」、西アジア考古学会『メソポタミアと周辺地域』第3回研究会、筑波大学茗荷谷校舎、2000年12月9日。
- 2) 1997年までに80点を数えていたが、1998~99年にさらに両翼鎌6点(遺物番号: 98000362, 98000802, 98000803, 98000804, 99000187, 99000188,)と三翼鎌1点(99000610)が検出された。

参考文献一覧

- Alekseev, A. Yu. 1992 *Скифская хроника*. Санкт-Петербург.
- Alekseev, A. Yu., N. K. Kachalova and S. R. Tokhtas'ev 1993 *Киммерийцы: этнокультурная принадлежность*. Санкт-Петербург, Информационно-исследовательский институт "Ермаков".
- Belinskii, A. B. 1990 К вопросу о времени появления шлемов ассирийского типа на Кавказе. *Советская археология* 4: 190-195.
- Bidzilya, V. I. and E. V. Yakobenko 1974 Киммерийские погребения высокой могилы. *Советская археология* 1: 148-159.
- Boehmer, R. M. 1972 *Die Kleinfunde von Boğazköy: aus den Grabungskampagnen 1931-1939 und 1952-1969*. Berlin, Gebr. Mann Verlag.
- Diakonoff, I. M. 1981 The Cimmerians. *Acta Iranica* 21: 103-140.
- Dobatur, A. I., D. P. Kallistov and I. A. Shishova 1982 *Народы наивысшей страны в "Истории" Геродота*. Москва, Наука.
- Erzen, A. 1978 *Çavuştepe I*. Ankara, Türk Tarih Kurumu Basimevi.
- Esayan, S. A. and M. N. Pogrebova 1985 *Скифские памятники Закавказья*. Москва, Наука.
- Eusebius 1956 *Die Chronik des Hieronymus*. Berlin, Akademie-Verlag.
- Galanina, L. K. and A. Yu. Alekssev 1990 Новые материалы к истории Закубанья в раннескифское время. *Археологический сборник* 30: 34-54.
- Galanina, L. K. 1997 *Келермесские курганы: "царские" погребения раннескифской эпохи*. Москва, Центр сравнительного изучения древних цивилизаций Института всеобщей истории РАН.
- Gryaznov, M. P. 1980 *Аржан: царский курган раннескифского времени*. Ленинград, Наука.
- Hauptmann, H. 1983 Neue Funde eurasischer Steppennomaden in Kleinasiens. In R.M. Boehmer and H. Hauptmann (ed.), *Beiträge zur Altertumskunde Kleinasiens: Festschrift für Kurt Bittel*: 251-270. Mainz, Philipp von Zabern.
- Heidel, A. 1956 A new hexagonal prism of Esarhaddon (676 B.C.). *Sumer* 12: 9-37.
- Il'inskaya, V. A. 1968 *Скифы Днепровского Лесостепного Левобережья*. Киев, Наукова думка.
- Illins'ka, V. A. 1973 Бронзові наконечники стріл так званого жаботинського і новочеркаського типів. *Археологія* 12: 13-26.
- Il'inskaya, V. A., B. N. Mozolevskii and A. I. Terenozhkin 1980 Курганы VI в. до н.э. у с. Матусов. In A. I. Terenozhkin (ed.), *Скифия и Кавказ*: 31-63. Киев, Наукова думка..
- Il'inskaya, V. A. and A. I. Terenozhkin 1983 *Скифия VII-IV вв. до н.э.* Киев, Наукова думка.
- Ismagilov, R. B. 1988 Погребение Большого гумаровского кургана в Южном Приуралье и проблема происхождения скифской культуры. *Археологический сборник* 29: 29-47.
- Ivanchik, A. I. 1993 *Les cimmeriens au Proche-Orient*. Fribourg, Editions Universitaires Fribourg.
- Ivanchik, A. 1999 The Scythian 'Rule over Asia': the classical tradition and the historical reality. In G. R. Tsetskhladze (ed.), *Ancient Greeks West and East*: 497-520. Leiden, E. J. Brill.
- Ivanchik, A. I. 2001 *Киммерийцы и скифы*. Москва, Центр сравнительного изучения древних цивилизаций Института всеобщей истории РАН.
- Kleiss, W. 1979 *Bastam I: Ausgrabungen in den urartaischen Anlagen 1972-1975*. Berlin..
- Klochko, V. I. 1979 Некоторые вопросы происхождения бронзовых наконечников стрел Северного Причерноморья VIII-VII вв. до н.э. In V.D. Baran (ed.), *Памятники древних культур Северного Причерноморья*: 40-46. Киев, Наукова думка..
- Kohler, E. L. 1995 *The lesser Phrygian tumuli, pt. I: the inhumations*. Philadelphia, The University Museum.
- Kossak, G. 1987 Von den Anfangen des skytho-iranischen Tierstils. In H. Franke (ed.), *Skythika*: 24-86. München, Bayerische Akademie der Wissenschaften.
- Kovpanenko, G. T. 1966 Носачівський курган VIII-VII ст. до н.е.

- Arхеология* 20: 174–179.
- Kuklina, I. V. 1985 *Этногеография Скифии: по античным источникам*. Ленинград, Наука.
- Lanfranchi, G. B. 1990 *I cimmeri: emergenza delle élites militari iraniche nel Vicino Oriente (VIII–VI sec. a.C.)*. Padova, sargon srl.
- Melyukova, A. I. 1964 *Вооружение скифов*. Москва, Наука.
- Muscarella, O. W. 1988 *Bronze and iron: ancient Near Eastern artifacts in the Metropolitan Museum of Art*. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Petrenko, V. G. 1980 Изображение богини Иштар из кургана в Ставрополье. *Краткие сообщения Института археологии* 162: 15–19.
- Piotrovskii, B. B. 1954 Скифы и древний восток. *Советская археология* 19: 141–158.
- Piotrovskii, B. B. 1959 *Ванское царство (Урарту)*. Москва, Наука.
- Pogrebova, M. N. 1977 К вопросу о миграции ираноязычных племен в восточное Закавказье в доскифскую эпоху. *Советская археология* 2: 55–68.
- Pogrebova, M. N. 2001 Закавказье и киммерийцы ассирийских текстов конца VIII в. до н.э. In A. V. Sedov (ed.), *Древние цивилизации Евразии: история и культура: 317–333..* Москва, Наука.
- Sauter, H. 2000 *Studien zum Kimmerienproblem*. Bonn, Rudolf Habelt.
- Seeher, J. 1998 Die Nekropole von Demircihüyük–Sarıket im 7. bis 4. Jahrhundert v. Chr. *Istanbuler Mitteilungen* 48: 135–155.
- Smirnov, K. F. 1961 *Вооружение сарматов*. Москва, Наука.
- State Archives of Assyria 1 Parpola, S. *The correspondence of Sargon II, pt.I: Letters from Assyria and the West*. Helsinki, Helsinki University Press, 1987.
- State Archives of Assyria 4 Starr, I. *Queries to the sungod: divination and politics in Sargonid Assyria*. Helsinki, Helsinki University Press, 1990.
- State Archives of Assyria 5 Lanfranchi, G.B. and S.. Parpola. *The correspondence of Sargon II, pt.II: Letters from the northern and northeastern provinces*. Helsinki, Helsinki University Press, 1990.
- State Archives of Assyria 6 Kwasman, T. and S. Parpola. *Legal transaction of the royal court of Nineveh, pt.I: Tiglath-Pileser III through Esarhaddon*. Helsinki, Helsinki University Press, 1991.
- 1991.
- Sulimirski, T. 1954 Scythian antiquities in Western Asia. *Artibus Asiae* 18: 282–318.
- Terenozhkin, A. I. 1971 Дата мингечаурских уди. *Советская археология* 4: 71–84.
- Terenozhkin, A. I. 1976 *Киммерийцы*. Киев, Наукова думка.
- Thureau-Dangin, F. 1929 Tell Ahmar. *Syria* 10: 185–205.
- Ünal, V. 1983 Zwei Gräber eurasischer Reiternomaden im nordlichen Zentralanatolien. *Beiträge zur allgemeinen und vergleichenden Archäologie* 4: 65–81.
- Vishnevskaya, O. A. 1973 *Культура сакских племен Низовьев Сырдарьи в VII–V вв. до н.э.* Москва, Наука.
- Yablonskii, L. T. 1991 Проблема формирования культуры саков Южного Приаралья. *Советская археология* 1: 72–89.
- ストラボン(飯尾都人訳) 1994 『ギリシア・ローマ世界地誌』1–2巻 龍溪書舎。
- 高浜秀 1980 「ソ連における先スキタイ文化の研究」『オリエント』22巻2号 100–115頁。
- 高浜秀 1994 「アナトリア出土のスキタイ系遺物二種について」『アナトリア考古学研究』3 27–35頁。
- 高浜秀 1999 「カマン・カレホユック出土の鳥頭紋骨製品」『アナトリア考古学研究』8 175–178頁。
- トログス、ポンペイウス著、ユニアヌス・ユスティヌス抄録(合阪学訳)1998 『地中海世界史』 西洋古典叢書 京都大学学術出版会。
- 藤川繁彦 1999 『中央ユーラシアの考古学』世界の考古学6 同成社。
- ヘロドトス(松平千秋訳) 1971 『歴史 上』 岩波書店。
- ヘロドトス(松平千秋訳) 1972 『歴史 中』 岩波書店。
- ホーメロス(吳茂一訳) 1964 『イーリアス 上』 岩波書店。
- ホーメロス(吳茂一訳) 1971 『オデュッセイア 上』 岩波書店。
- 本郷一美 1999 「カマン・カレホユック第IIb層出土の動物遺存体」『アナトリア考古学研究』8 179–197頁。
- 雪嶋宏一 1997 「先スキタイ時代の編年をめぐる最近の見解」『草原考古通信』8 2–8頁。
- 雪嶋宏一 1998 「カマン・カレホユックの金属製錠」『アナトリア考古学研究』7 183–204頁。

雪嶋宏一
早稲田大学大学図書館
Koichi YUKISHIMA
Waseda University Library